

林業試験場道南支場における クリ在来品種の生育と果実の品質

館 和 夫*

Growth and nut-qualities of chestnut varieties at Donan-
branch of the Hokkaido Forestry Research Institute.

KAZUO TATE*

要 旨

北海道立林業試験場道南支場（函館市）に、1974年に設定したクリ品種・系統比較試験林内の38品種の栽培成績を調査した結果、生存率および果実の収量、品質などから、供試品種のうち下記の8品種が函館地区における適応品種と認められた。

〔ニホングリ品種〕（早生種）福来，東濃2号，大国早生，大和早生；（中生種）丹沢，岩手3号；（晩生種）有磨

〔中国グリ品種〕（中生種）北華

はじめに

渡島支庁管内では、戦前、茅部グリの産地として知られた森町ならびに大野盆地周辺の各町村から、相当量のクリが生産されていた。しかし、それらのクリ林の大部分は、その後老木となって伐採されるか、あるいは畑などに転用されて、生産規模が大幅に縮小された。1960年代から70年代の初めにかけて、これらの町村を中心に産地の復興が図られ、北海道林務部の調査資料（1970）によると、1968年には84戸が4400本ほど栽培するに至った。しかし、主として本州からの移入苗によって造成されたそれらの栽培地は、未収穫のままに終わったものが多いようで、1988年現在確認できる栽培戸数は37戸、面積は19ha程度（北海道林務部林産課，1988）にすぎない。

このように、近年のクリ栽培が不成績であった原因の一つとして植栽品種の不適應性があげられる。この地方のクリ栽培を振興するためには、地域に適した品種・系統を選定する必要がある。この報告では、クリ品種・系統別比較試験林の14年間の栽培成績の調査結果に基づき、函館地区に適應可能と思われる品種について述べる。

試験の概要

1 試験林の概況

1968年から1974年にかけて、北海道立林業試験場道南支場（函館市桔梗町）構内に面積1.7ha、延べ700本におよぶクリが適応試験や実生選抜の目的で試植された。それらのうち0.5haは、クリ品種・

* 北海道立林業試験場 Hokkaido Forestry Research Institute, Bibai, Hokkaido 079-01

〔北海道林業試験場研究報告 第28号 平成2年11月, Bulletin of the Hokkaido Forestry Research Institute, No. 28, November, 1990〕

系統比較試験林(約60品種180本)として1974年5月に設定されたものである。植栽間隔は5m×5mの正方形植えで、ニホングリと中国グリ別に、また同一品種がなるべく隣接しないように植えられている。

今回成績を取りまとめた供試木の内訳は、表-1に示した合計38品種100本である。供試材料の大部分は本州地方で育成されたニホングリの子来品種または登録品種であるが、ほかに本州産の中国グリF₁とみられる2品種(利平, 田辺)および道内で育成した中国グリ4種を含んでいる。

表-1 供試品種の生存率および被害原因

種別	No.	品 種 名	(原産地)	配植 本数	生立 本数	生存率 (%)	原因別枯死本数				クワマバチ 被害本数
							接木不親和	胴枯病	寒害	外傷	
ニホングリ系	1	森 早 生	(神奈川)	4	2	50			2		1
	2	福 来	(〃)	3	3	100					
	3	ち 一 7	(〃)	3	1	33			2		
	4	東濃 2号	(〃)	2	2	100					1
	5	大 国 早生	(〃)	3	3	100					
	6	大 和 早生	(〃)	3	2	67			1		
	7	出 雲	(〃)	3	1	33		2			
	8	丹 沢	(〃)	2	2	100					1
	9	伊 吹	(〃)	3	1	33	1	1			
	10	岩手 3号	(岩手)	3	2	67		1			1
	11	千 里	(神奈川)	2	1	50			1		
	12	由 利	(〃)	3	2	67		1			
	13	E 一 11	(〃)	2	2	100					
	14	岸 根	(山 口)	3	1	33			2		
	15	有 磨	(神奈川)	2	2	100					
	16	今 北	(兵 庫)	3	2	67				1	1
	17	小布施 2号	(長 野)	3	2	67		1			
	18	銀 鈴	(徳 島)	2	1	50			1		
	19	豊多摩早生	(東 京)	2	0	0			2		1
	20	山口早生	(徳 島)	2	0	0			2		
	21	千代田早生	(茨 城)	3	0	0			3		
	22	玉 造	(神奈川)	3	0	0			3		
	23	東濃 1号	(〃)	1	0	0		1			
	24	岩手 1号	(岩手)	3	0	0		3			1
	25	筑 波	(神奈川)	3	0	0		2	1		
	26	中生 丹	(関 東)	1	0	0		1			
	27	石 鎚	(神奈川)	3	0	0		1	2		
	28	乙 宗	(兵 庫)	1	0	0			1		1
	29	赤 中	(愛 媛)	3	0	0			3		
	30	錦 秋	(関 東)	3	0	0		1	2		
	31	鹿 ノ 爪	(大 阪)	1	0	0			1		
	32	Z 一 1	(神奈川)	2	0	0			2		
計	32 品 種		80	32	40	1	15	31	1	8	
中国グリ系	33	利 平	(岐 阜)	3	2	67				1	
	34	北 冠	(北海道)	3	1	33		1		1	1
	35	北 華	(〃)	3	2	67		1			2
	36	重 鎮	(〃)	3	1	33		2			1
	37	田 辺	(京 都)	5	3	60	1		1		1
	38	日 華	(北海道)	3	0	0	1	2			1
計	6 品 種		20	9	45	2	6	1	2	6	
合 計	38 品 種		100	41	41	3	21	32	3	14	

2 地況および土壌条件

試験地は、函館駅の北方約8km、横津岳南麓の標高約60mの平坦な洪積台地上に位置している。昭和初期までは牧場として、その後は長期にわたって苗畑として使用されていた。

土壌型はBl₀型で、表土の約30cmまでは古期火山灰系の黒色壤土、下層土は大小の円礫を含むやや堅密な砂壤土である。なお、表土は、PH6.3、炭素率5.9%、全窒素0.44%、燐酸吸収係数1000~1500、置換性石灰14.2me/100gで、クリ園の培土としては特に矯正を要しない。

3 気象条件

試験期間中の気象条件を、表-2に示した。函館では、本州北部の主な栽培地である秋田地方に比較して、日照時間はやや長いが、年平均気温、最低気温とも低く、年降水量は500mm以上少ない。ちなみに、経済的に採算のとれるニホングリ栽培地の北限は、秋田、岩手の両県に相当する年平均気温10℃～12℃前後、最低気温-15℃以上の地域とされている(志村, 1972)。

一方、中国グリの栽培北限は河北省の営口、承德付近で、それらの地方の年平均気温は8℃～12℃、最低気温(極値)は-40℃(志村, 1972)である。したがって、上記のような試験地の気象条件は、栽培グリ、特にニホングリの栽培環境としては、かなり厳しいといえる。

表-2 試験期間中(1974~1987)の気候

観測項目	地区別		秋田
	函	館	
年平均気温(℃)	8.1	(7.8~9.0)	11.0
年降水量(mm)	1093	(673~1484)	1674
日照時間(ha)	1967	(1713~2151)	1809
最低気温(℃)	-14.3	(-16.1~-12.7)	-11.8
最大積雪量(cm)	54	(32~91)	(117)

注) 函館海洋気象台並びに秋田地方気象台の気象観測原簿から作成。

表-3 調査項目と方法

調査項目	調査・評価方法
1. 品種の適応性	
1) 生存率および枯損原因	1974年5月に植栽した各品種系統の供試本数に対する1987年11月現在の残存本数の比率により、適応性の程度を5段階に区分した。また、試験期間中、毎年5~6月、および10~11月にこの被害状況を調べ、主な被害原因別に枯損本数を記録した。なお、枯損にまで至っていないが主要な被害の一つとしてクリタマバチによる被害本数も記録した。
2) 樹体の大きさ	1987年11月現在、生立している供試木の樹高と樹冠幅、および幹周を測定した。
3) 樹形	樹高と樹冠幅の比により、樹形を直立型、中間型、開張型とその中間型の5段階に区分した。
4) 樹勢	主として樹体の大きさにより、強、やや強、中、やや弱、弱の5段階に区分した。
2. 品種の生物季節	結実年齢に達した品種別の供試木各1個体について、1978年以降3年間次の諸項目を調査した。
1) 開芽期	充実した主枝の先芽が80%程度開いた時期
2) 開花最盛期	雄花では花穂のヤクが80%程度開いた時期、雌花では3花柱が80%程度そろった時期
3) 果実の成熟期	落果の始期、盛期、終期
4) 落葉期	着葉の80%程度が落下した時期
3. 果実の収量	
1) 累年収量	結実開始期以降、品種別に残存する供試木の収量を毎年調査し、1本当たりの累年収量を求めた。
4. 果実の形態と品質	
1) 平均果重	収穫終了後数日間、品種ごとに集積して陰干しした状態の健全果の全量(約250粒平均)を秤量して、1個当たりの果重を求めた。
2) 平均果径	結実開始後3年間、1品種当たり20個の果実の果幅および果高を測定した。
3) 粒ぞろい	果実のバラツキの程度により粒ぞろいの良否を5段階に区分した。
4) 健全果率	収穫した未選果の果実(約280粒平均)について各品種ごとに奇形果、裂果、双子果、虫害果、などを除いた健全果の数を1978年、1980年に調べ、調査果数に対する粒数比を求め5段階に区分した。
5) 充実度	収穫した果実(各品種20~50粒)を比重1.02に調製した塩水液に浸漬して浮いた果数により充実度を5段階に区分した。
6) 貯蔵性	保存する場合の貯蔵性の良否を確かめるため、湿ったパーミキュライトに埋蔵した果実を翌春取り出して、各品種の実腐れ率を調査した。
7) 果肉の色	果肉の色を肉眼判定により乳白、淡黄、黄の3段階に区分した。
8) 甘味	水煮した果実について食味を検し、甘味の程度をやや多、中、やや少の3段階に区分した。

4 試験林の管理経過

植栽後3年間、カルチベーターにより耕うん栽培を行い、その後は、順次オーチャードグラス等の草生栽培に移行した。下刈りを年2回ないし3回、6月下旬から9月下旬までに行い、刈り取った草は林外に持ち出さず、緑肥としてその場に敷き込んだ。施肥については、植付け時に、基肥として完熟したワラ堆肥を1本当たり約10kg施用した。また、追肥として1978年5月にパーク堆肥を植栽木1本当たり約5kg施用したほか、成分量(単位;g)でN(130), P(150), K(180)ずつの化学肥料を2回に分けて施用した。結実年齢に達した後は、2ないし3年おきに休眠期に枯れ上がった枝や徒長枝を対象としてせん定・整枝した。

5 調査項目と方法

供試木の調査項目および評価方法は、表-3に示すとおりである。

結果および考察

1 品種の適応性

1) 生存率および枯損原因

ニホングリ系では、供試木32品種80本のうち最終調査時まで残存したものは18品種32本、生存率40%であった。一方、中国グリ系では6品種20本のうち5品種9本(生存率45%)であり、ニホングリ系と中国グリ系の生存率はほぼ同じであった。しかし、品種別には違いが大きく、当初の植栽木が全数残存したものがニホングリ系では福来など6品種あるが、中国グリ系にはそのような品種は認められなかった。

主な枯損原因をみると、ニホングリ系には寒害が、中国グリ系には胴枯病が多く、枯損本数中に占める割合は、それぞれ65%と55%であった。

2) 樹体の大きさ

最終調査時の樹高、樹冠幅および幹周りの平均値を品種別に表-4に示した。樹高と樹冠の広がり大きい品種は、ニホングリ系の東濃2号、千里、岩手3号など、中国グリ系の重鎮などであった。また逆に小さいものはニホングリ系の銀鈴、今北などであった。このように、ニホングリ系の樹体の大きさには品種による大きな差があるが、中国グリ系には、ニホングリ系ほど大きな差はみられない。

3) 樹形

品種別の樹形を供試木の樹冠幅(C)と樹高(H)の比(C/H)によって区分した(表-4)。直立型ないしそれに準ずるものとして、千里、北華など

表-4 供試品種の成長特性

品種名	樹体の大きさ			幹周 T (cm)	樹形	樹勢
	樹高 H (m)	樹冠幅 C (m)	C/H 比			
森 早 生	5.5	5.1	0.93	46	中間型	中
福 来	6.5	6.7	1.03	56	〃	やや強
ち - 7	4.3	3.8	0.88	30	やや直立型	弱
東濃 2号	7.3	6.4	0.88	65	〃	強
大 国 早 生	6.2	5.9	0.95	52	中間型	中
大 和 早 生	5.7	6.2	1.09	47	〃	〃
出 雲	5.6	4.8	0.86	51	やや直立型	〃
丹 沢	6.1	5.8	0.95	54	中間型	〃
伊 吹	4.2	4.0	0.95	47	〃	弱
岩 手 3号	7.1	6.7	0.94	61	〃	強
千 里	7.5	6.0	0.80	55	直立型	〃
由 利	6.1	5.8	0.95	60	中間型	中
E - 11	5.4	5.3	0.98	47	〃	〃
岸 根	5.4	4.9	0.91	51	〃	〃
有 磨	4.6	6.1	1.33	51	開張型	〃
今 北	4.0	4.6	1.15	35	やや開張型	弱
小布施 2号	6.8	6.8	1.00	67	中間型	やや強
銀 鈴	3.4	3.8	1.12	43	やや開張型	弱
ニホングリ系 平 均	5.7	5.5	0.96	51		
利 平	4.8	5.0	1.04	53	中間型	やや弱
北 冠	4.8	6.2	1.29	56	開張型	中
北 華	5.1	3.6	0.71	51	直立型	やや弱
重 鎮	6.3	6.0	0.95	60	中間型	中
田 辺	4.5	5.4	1.20	40	やや開張型	やや弱
中国グリ系 平 均	5.1	5.2	1.02	52		

注) 樹形; 直立型(0.80以下), 中間型(0.91~1.10), 開張型(1.21以上), 他はその中間。

があげられる。また、開張型ないしそれに近いものは有磨、北冠などである。ニホングリでは、比較的早生系の品種に直立型ないしそれに準ずるタイプが多く、晩生系にはその逆の傾向がみられた。なお、中国グリ系では、直立型は北華1種だけで、他は開張型もしくは中間型に準ずるタイプであった。

4) 樹 勢

樹体の大きさを主な指標として品種の樹勢を判定した結果を、表-4に示した。樹体の大きい品種は樹勢が強く、小さい品種は弱い傾向がみられた。

2 品種の生物季節

1) 開 芽 期

結実樹齢以後に観察した品種の平均的な開芽期(表-5)は、5月の中旬に集中しているが、年により1週間程度の違いがみられる。品種ごとの開芽期の早晩はほぼ一定で、早生種はやや早く、晩生種は遅く開芽する傾向がある。

2) 開花盛期

開花は、各品種とも7月上旬に始まり、下旬に終わるものが多い。平均的な開花盛期は表-5に示すとおりで、後述する果実の成熟期ほどに早晩の差は顕著でない。

3) 果実の成熟期

品種別の収穫時期を知るため、結実開始以後毎年収穫調査を行い、平均的な収穫最多日より、熟期の早晩を下記のようにグループ分けした。

〔早生種〕 (9月30日~10月9日)

森早生, 福来, ちー7, 東濃2号, 大和早生, 大和早生

表-5 供試品種の生物季節

熟期 区分	品種名	開芽期 (月,日)	開花盛期(月,日)		果実の成熟期(月,日)			落葉期 (月,旬)	
			雄花	雌花	始期	盛期	終期		
早生	森 早 生	5.12	7.14	7.12	9.29	10. 1	10. 7	11. 上	
	福 来	5.10	7.18	7.11	9.29	10. 1	10. 8	〃	
	ちー7	5.15	7.19	7.16	10. 3	10. 7	10.12	11. 中	
	東濃2号	5.11	7.19	7.13	10. 5	10. 8	10.15	〃	
	大和早生	5.10	7.18	7.13	10. 5	10. 9	10.17	〃	
	大和早生	5.14	7.20	7.17	10. 5	10. 9	10.21	〃	
	中生	出 雲 沢	5.15	7.18	7.15	10. 5	10.10	10.16	11. 中
		伊 吹	5.16	7.19	7.18	10. 6	10.10	10.17	〃
		岩手3号	5.17	7.20	7.19	10. 7	10.10	10.17	11. 上
		千 里	5.14	7.19	7.18	10. 6	10.11	10.18	〃
晩生	由 利	5.15	7.21	7.15	10. 4	10.11	10.16	11. 中	
	E-11	5.15	7.20	7.19	10.16	10.19	10.30	〃	
	岸 根	5.17	7.25	7.20	10.13	10.22	10.26	11. 中	
	有 磨	5.19	7.21	7.19	10.18	10.22	10.27	〃	
	今 北	5.16	7.20	7.19	10.20	10.23	10.29	11. 下	
	小布施2号	5.18	7.22	7.21	10.20	10.25	10.30	〃	
	銀 鈴	5.18	7.22	7.20	10.22	10.29	11. 2	〃	
	銀 鈴	5.19	7.25	7.23	10.25	10.30	11. 5	〃	
	平 均	5.15	7.20	7.17	10.10	10.14	10.21	11. 中	
中生	利 平	5.17	7.22	7.20	10.12	10.16	10.21	11. 中	
	北 冠	5.17	7.21	7.17	10. 9	10.12	10.17	〃	
	北 華	5.16	7.21	7.19	10.11	10.17	10.22	〃	
	重 鎮	5.17	7.18	7.19	10.13	10.19	10.23	〃	
晩生	田 辺	5.16	7.21	7.21	10.15	10.20	10.26	11. 中	
	平 均	5.17	7.21	7.19	10.11	10.16	10.22		

- 〔中生種〕（10月10日～10月19日）
出雲、丹沢、伊吹、岩手3号、千里、由利、利平、北冠、重鎮、北華
- 〔晩生種〕（10月20日～10月31日）
E-11、岸根、有磨、今北、小布施2号、田辺、銀鈴

4) 落葉期

品種別の落葉期は、表-5のとおりである。11月中旬に80%以上落葉するものが大部分で、ニホングリと中国グリの間には顕著な差はみられなかった。

3 果実の収量

1) 累年収量

1本当たりの果実の累年収量を、表-6に示した。ニホングリのうちで収量が最も多かったものは岩手3号で、正常に成長した個体の結実開始後10年間の総収量は52kgであった。また、それに次ぐものは大和早生の45kg、福来の28kg、大和早生の27kgなどであった。逆に収量の少ないものは、銀鈴など10kg未満のもので大半のものは10kg以上20kg未満の範囲内にあった。

一方、中国グリ系品種では、28kgの収穫をあげた重鎮をはじめとして、23～25kgの北華や北冠がそれに続き、田辺と利平はいずれも10kg内外で収量が少なかった。

以上の結果から、供試品種の道内における収量水準は本州方面に比べてかなり低いと判断される。一例をあげると、丹沢は茨城県下では10年生で1本当たり約50kgの累年収量をあげている（猪崎、1978）が、当地方では、結実開始後10年を経た14年生のニホングリで平均約19kg（丹沢も同じ）、中国グリで約20kg程度にとどまる。したがって、函館地区でより多くの収量をあげるためには、ニホングリ品種のうちから成績の良いものを厳選する必要がある。また、立地に対する適応がより大きい中国グリ系の品種を用いるなど、栽培方針の変更を要する場合も多いと思われる。

4 果実の形態と品質

1) 平均果重

供試品種のうち、1個当たりの果重が最も重かったのは岸根の約15g（この品種は年によっては22g以上の大果を産することもある）であった。他の大部分は10g以上15g未満の小果、ないしは10g未満の極小果であった。

道内に導入されたニホングリの収量が少ないのは、生育期間が短いうえに気象条件が厳しいため、多くの品種が本来の特性を発揮できないことによると考えられる。一方、焼きグリ向きとされる中国グリの場合は、1果当たり10g内外の果重が望ましいとされており、果重が小さいことはニホングリの場合ほど問題視されない。したがって果重が8～12g内外の品種であれば、十分そのような用途に対応できるものと思われる。

2) 果形および果径

主な供試品種の果形（側果の外側面）を写真-1に掲げた。在来品種の果実の基本的な果形には大きな差異はみられないが、果実の大きさは全体として小型である。また、年によっては登熟が不十分なため、本来の果形を表していないものもみられた。

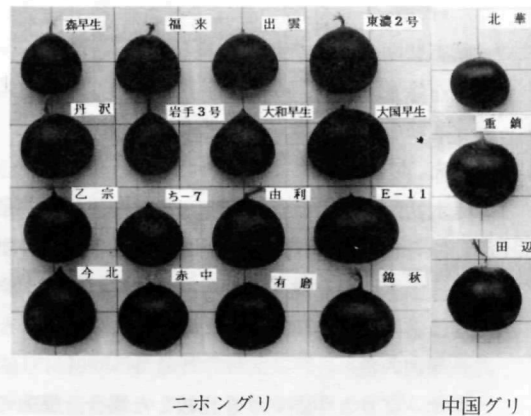


写真-1 主要品種の果形（1981，函館）

3) 粒ぞろい

果径を測定した際の標本果の果重の標準偏差により粒ぞろいを判定した結果(表-6), 粒ぞろいが良かったのは, ニホングリでは由利などの5品種, 中国グリでは利平など3品種であった。

4) 健全果率

結実初期のニホングリ18品種の平均健全果率(未熟果, 虫害, 奇形, 双子などの欠陥果を除いた果数の比率)は, 85%であった。健全果率の高い品種は, 大和早生および東濃2号を除くと, 有磨, 今北, E-11, 由利などの晩生種ないしはそれに近い中生種に多かった。一方, 中国グリ5品種の健全果率は80%で, 田辺, 北華, 利平の3品種の健全果率が高かった(表-6)。

表-6 品種別の果実の形態と収量

品種名	結実年数	累年収量(kg)	平均果重(g)	平均果径(mm) 果幅 果高	粒ぞろい	健全果率(%)	貯蔵果実腐れ率(%)	浮果率(%) (比重1.02)	果肉の色	甘味
森早生	10	13	11.2	30 32	中	70	63	43	乳白	中
福来	10	28	9.8	31 31	〃	79	48	56	〃	やや多
ち一7	8	8	10.3	30 31	〃	73	18	44	淡黄	中
東濃2号	9	22	11.6	33 32	やや良	88	29	64	〃	やや多
大和早生	9	27	11.9	33 31	中	80	40	28	〃	中
大和早生	10	45	9.7	34 33	〃	94	9	39	乳白	やや少
出雲	9	14	11.6	32 31	〃	73	26	3	淡黄	中
丹沢	9	19	11.4	35 34	〃	87	14	20	〃	〃
伊吹	10	15	11.1	32 29	やや良	75	12	36	黄	やや多
岩手3号	9	52	7.9	29 28	やや不良	79	32	7	乳白	〃
千里	9	20	9.1	30 30	中	85	18	30	淡黄	〃
由利	7	14	10.5	34 34	良	94	14	13	〃	中
E-11	8	14	9.7	35 31	やや良	92	20	24	〃	〃
岸根	8	17	14.8	34 32	中	85	20	—	乳白	やや少
有磨	9	12	8.9	34 33	〃	98	2	17	淡黄	中
今北	6	10	7.4	30 32	やや良	95	2	9	乳白	〃
小布施2号	8	9	9.8	31 30	中	92	5	5	淡黄	〃
銀鈴	6	7	10.3	—	—	88	4	19	〃	やや多
ニホングリ系平均	9	19	10.4	32 31		85	21	27		
利平	5	11	9.4	27 25	やや良	94	30	30	淡黄	やや多
北冠	7	25	13.6	—	—	55	10	—	〃	中
北華	10	23	7.7	23 24	良	94	10	21	〃	〃
重鎮	10	28	12.4	33 29	やや良	60	70	32	〃	〃
田辺	6	12	9.4	29 29	やや不良	96	35	76	乳白	やや少
中国グリ系平均	8	20	10.5	28 27		80	31	40		

注) 浮果率は, 1980年から2年間塩水比重液により各品種20~50個の果実を選果した際のデータによる。

5) 貯蔵性

結実初期の段階で実腐れ率(表-5)が低く, 貯蔵性に優れているものは, ニホングリでは, 大和早生を除き, 有磨, 今北, 小布施2号など晩生系のものに多かった。なお, 中国グリでは中生種の北冠と北華の実腐れ率がやや低かった。

6) 充実度

結実初期の果実について塩水比重液による選果を行った結果, 浮果の少ない充実した果実が多い傾向がみられた品種は, ニホングリでは中生種の出雲, 岩手3号, 晩生種の小布施2号であり, 中国グリでは中生種の北華であった。全体に浮果率がやや高い水準となっている(表-6)が, 試験材料に収穫後室内に数日間品種別に集積し, 陰干した状態の果実を使用したためである。

7) 果肉の色

ニホングリと中国グリを比較した場合, 果肉の色が淡黄色を示しているものは中国グリに多かった。

8) 甘味

甘味についてはニホングリ、中国グリとも中程度にランクされるものが多かった。大部分が水煮によって調理される地元の消費慣行上の問題もあり、中国グリは甘味が必ずしも優れている結果とはならなかった。

5 渡島地方で栽培可能な適応品種

供試品種の中には植栽後消滅したものが多いが(表-1)、これらは適応性が低く、渡島地方の栽培種としては不適と考えられる。栽培を考えた場合、まず地域に適応できる生存率の高い、果実生産性の高い品種を選ぶ必要がある。表-7にこれまで述べてきた各品種の評価をとりまとめた。

品種別にみた生存率と収量などから、渡島地方では、福来、東濃2号、大国早生、大和早生、丹沢、岩手3号、有磨、および北華の8品種が比較的有利に栽培できる適応品種とみなされる。

道内でクリを栽培する場合は、これまで述べてきた品種ごとの特性に留意し、立地環境や栽培目標に適合した品種を選択するとともに、若齢期の防寒、防風処置および枝打ち痕のコーティング(防水殺菌処理)などの保護対策に万全を期す必要がある。

表-7 品種別の特性とその評価

種別	品種名	生存率	収量	樹勢	健全果の割合	充実度	平均果重	甘味	貯蔵性	粒揃い	クリタマバチ	総合評価
ニホングリ系	森福	早生	C	D	C	D	C	C	E	C	B	C
	濃	7号	A	C	B	D	D	B	E	C	A	A
	東大	2号	D	B	E	C	C	C	B	C	A	E
	出	早生	A	C	A	B	D	C	C	B	B	B
	大和	早生	A	C	C	C	B	C	E	C	A	B
	丹沢	雲	B	A	C	A	C	D	A	C	A	A
	伊吹	沢	D	D	C	C	A	C	C	C	A	D
	岩手	3号	A	D	C	B	B	C	B	B	B	B
	千由	里利	D	D	E	C	C	C	B	B	B	A
	E	11	B	A	A	C	A	E	B	D	D	B
	岸有	根磨	C	D	A	B	B	D	B	B	C	A
	今小	北華	D	D	C	B	—	A	D	C	A	D
	布施	2号	A	D	C	A	B	D	C	A	C	B
	銀	鈴	B	E	E	A	A	E	C	A	B	C
	中国グリ系	利北	平冠	B	D	D	A	B	B	C	B	A
北重		華鎮	D	C	C	E	—	C	C	B	—	D
田		鎮辺	B	C	D	A	B	C	C	B	A	B
			D	C	C	E	C	C	C	E	B	D

注) 総合評価は、生存率および果実生産性を主な基準とし、その他の因子も加味した。

おわりに

道内でクリを栽培しようとする場合、品種の選択が事業の成否を左右する鍵になる場合が多い。いずれの品種も特性に一長一短があるが、特に気象条件のきびしい本道では、好ましい特性を持った品種をさらに厳選して使い分け、十分な管理を行う必要がある。

終わりに、本試験林の設定に当たって苗木や接穂などの貴重な試験材料を提供された青森県林業試験場、岩手県林業試験場、茨城県園芸試験場の関係者、並びに初期の試験林の設定に当たられた中内武五郎元道南試験地主任、栽培管理を担当された寺尾喜典林業技能員ほか多くの苗畑作業員の皆様に心からお礼を申し上げる。

文 献

- 北海道林務部 1970 北海道におけるクリ・クルミの植栽現況. 34
————— 1988 北海道特殊林産物統計 19
- 猪崎政敏 1978 クリ栽培の理論と実際. 博文館 579pp
- 志村 勳 1972 果樹園芸大事典 養賢堂 1309pp
- 为国末幸 1969 クリの栽培と経営 誠文堂新光社 266pp
- 館 和夫 1981 函館地方におけるクリ栽培 光珠内季報 48:17-22
————— 1972a 函館地方の中国グリ栽培. 光珠内季報 51:15-19
————— 1982b 道南地方におけるクリ栽培の現状. 光珠内季報 54:18-24
- ・斎藤 晶 1987 クリ主要品種の函館地方における栽培成績と保護管理上の問題点. 昭和61年 道林研論:238-239
- 中原照男 1984 焼きぐり用耐虫性品種の育成試験. 兵庫県立林業試験場業務年報 昭和59年度:27-28